

□●バウハウス舞台芸術発表○◆

▼はじめに

今回の共通文献、『バウハウスの舞台』は舞台の専任教授であるシュレンマーが1925年にバウハウス叢書としてモホリ＝ナギとモルナールとともに著したものである。バウハウスがでっさうに移転するに伴い、シュレンマーが新校舎の舞台を自由に使えるようになり「人間とそれを取り巻く空間の関係」、「空間における人間」の追及を推し進めたのである。彼が様々な舞台実験を繰り返していく中で身体論が常に中心となっており、それがバウハウスの舞台作品に大きな刺激を与えたとされている。今回の発表では、彼の理論に焦点を当て、舞台における身体の役割についてみなさんと考えていきたいと思えます。

▼3つの新しい劇場空間

「客席と舞台が完全に分離されたことにより、観客が演技の外におかれ参加できないものとなっている」by グロピウス以上のことを問題点と見出し、これに対する回答、そしてバウハウスの理念の一つである、『皆すべて平等』に、という点に着目して以下のような新しい劇場を提案していった。

※全体劇場

- ・中央の舞台を客席が取り囲むような楕円型の劇場
- ・一つの建築で三様の使い方が可能
- ・中央の舞台が回転できるような機構

※U劇場

- ・四つの舞台を組み入れたU字型の劇場
- ・三次元に構成された舞台
 - セリで昇降可能な舞台、バルコニーのような舞台

※球体劇場

- ・床から天井まで螺旋状の演技空間
 - ところどころに作られたプラットフォームやステージ
- ・各席は球体の下半分の壁面にある

▼ロータル・シュライヤー

1921年画廊「シュトラム」を営むサークルから舞台芸術担当の教授としてバウハウスに招聘された。

◎主眼は「新しい人間」の創造

- ×旧来の劇場芸術を元に前衛化させる表現主義としての舞台芸術
- 身体・色彩・音などの諸要素が構築する空間としての舞台芸術
- ・形態・身体・音などの諸要素が構築する空間としての舞台芸術
- ・色彩…黒・青・緑・黄・白
- ・運動…水平・下降・スパイラル
- ・音…声や音からリズムを導く

→空間をすべて言語表現による記述に置き換え定義し直し、空間を抽象化して理論的に再構築し、表現主義の舞台芸術から脱却することを目指した。

▼オスカー・シュレンマー

シュレンマーの身体空間論＝「数字としての身体」

※二種類の数学的身体空間モデル

立体空間の法則…「関節機構」としての身体
有機的人間の法則…身体中心の空間線

※『トリアディック・バレエ』公演 1922年

- ・すべての世界観は3つの要素で認識された
 - Ex、三人の出演者、三部構成
 - 色彩(赤・青・黄)、形(○・□・△)、舞台(空間・形・色彩)
- ・フィギュア計画→四つの基本舞台衣装
- ・コスチューム…空間との関係を生み出すために身体を抽象化し、意味としての存在を置き換える働き
- 人工的素材の使用により空間との一体化を高める

※『棒ダンス』『リングダンス』

※機械的な人口人物＝ロボット、マリオネット

あらゆる運動を、任意の時間継続してあらゆる姿勢を許容する

▼モホリ＝ナギ

彼は造形教育の中で、人間も舞台を構成する上で色彩(光)、運動、空間などの要素の一つであると考え、またそれらすべてで一つの有機体を構成しようとした。

※全体性の演劇

- ・舞台隔離の廃止
- ・「見る人」と「見られる人」の緊張関係
- ・人間の運動と思考の連続を、音、光(色)、形、運動の統制された要素と透過的に扱う
- ・バウハウスとモホリ＝ナギの理念→「統一形態」

▼考察

バウハウスの舞台芸術は舞台と建築を同じようにとらえて、舞台作品において個々の部分が統合されて高次の生き生きとした総体を構成するために、多彩な芸術的諸要素が再構築され、「より新しいより大きな統一体」となることを目指していた。

最近演劇というと、いかに感情を顔や身体で表現できるかということに主がかけられているかもしれない。しかし、ここでは例えば、動きにくいようなまだ脱人間的なコスチュームを着て演技することで、視覚的に惑わされることなく、余分な身体的表現が排除され、本来の見えにくい身体の美がより強調されるのではないだろうか。つまり、人間自体を抽象化することで、より人間らしさが現れるということである。

また『棒ダンス』などにおいて、ものが主体として表現される場合、それを動かす身体の運動がいつも以上に意識されるようになるのは不思議である。このように、私たちは空間における人間との関係性を見出すことができる。ストーリー性だけが注目されがちな時代に、「舞台」という空間を純粹に生かした芸術表現を実際に演劇活動で私たちに示してくれ、それに秘める可能性を私たちにもう一度提示してくれたのではないだろうか。

▼議論点

シュレンマーの空間理論において、身体は数学的かつ幾何学的に規定された一つの型であると同時に、空間を把握する存在でありました。また、空間とはそこに人間が介在して成り立つものとして、人間との関係性の中に空間をとらえています。皆さんは彼のこのような理論についてどう考えますか。また身近といえる空間と身体の間わりについてどう考えていますか。

▼参考文献

- 『世紀末の都市と身体－芸術と空間あるいはユートピアの彼方へ』長谷川章 ブリュッケ
 『バウハウス叢書－4バウハウスの舞台』オスカー・シュレンマー 中央公論美術出版社
 『バウハウス－歴史と理念』利光功 美術出版社
 『バウハウスとその周辺 II』利光功 中央公論美術出版